

日々が死の練習

私たちの老人ホームで、珍しく、お二人のお葬式が続いた。ホーム葬は身寄りのない人だけに限られているからである。

二番目のBさんのお葬式がすむと、Cさんが沈痛な面持ちで私の部屋まで来て真剣に言うのである。「私もここで葬式をしてほしい」。夫君もあり家も近いのに、おかしい。わけを聞くと、二つの葬式には差がなく、どれもりっぱだったからというのである。

そういえば、一人は園一番の金持ち、もう一人のBさんは無一文、そのBさんがどう扱われるかを、Cさんは見ていたのである。―私たちは見つめられている。

ここ任運荘を終の住み処と決めているお年よりにとって、最大唯一の関心は己が死に際、己が死に様である。死につかんとするとき、安らかな死を迎えられるか。ただそれをのみ思い煩う日夜の生である。それさえかなえられれば、わが人生すべてよしと観じているに違いない。

ある人は、白い旅立着に添えて若き日の写真を示し、「忘れないで。主人は私の若い時の顔しか知らないから」と旅立った。ある人は、晩年に寮母を「先生」と呼んでいた。先生といつてやるとよくしてくれるから、という計算であった。

ある人は臨終で一時よみがえったとき言った。「まだ生きていたんですね。寮母さん、おせわになりました」。

ひとそれぞれの旅立ちの姿ではあるが、すべての人に一様に「覚悟」があった。「往生」という肅然^{しゆくぜん}えりを正さしめる場面が、まちがいない、そこにはあった。人間とは、他の生物と違って、意識を残すかぎり、自分で自分の生を完結する存在である。赤裸^{せきら}無力のままでも全力でそれを完成する存在である。日々がよく死ぬ練習である。入所しばらくは泣いて徘徊していた重度痴呆の男性老人が、最近浴槽で洗われながらつぶやいていた。「わしは死んだら、任運荘からやって来たと言うで、胸はつな」。

(一九八八年一月十三日)